

第2分科会

自然との関りから「いのち」のつながりを感じる

指導助言者	井田	昭彦
司会者	永見	宏樹
発表者	中島	弘子
	天津	容子
記録者	須藤	麻未

記

1. 発表の概要

(1) 主題設定理由

子どもは、自然とふれあう中で、好奇心や探求心を膨らませる。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に「自然との関わり・生命尊重」があるように、自然との関わりは子どもたちに大きな影響を与え、自然とのふれあいを通して「生」と「死」、いのちの大切さを考えることができる。

今回自然との関わりを通して、子どもたちがどのようなことを学び、どのように心が動いていくか、実践を通して考えていきたい。

(2) 取り組みについて

本園では仏教保育を根幹に置き、普段から自然との関わりを通して「いのちの教育」を行っている。幼児期から「いのち」について考え、理解することは難しいことだが、知識として言葉で教えて育むよりも、幼児期から人と人、人と他の生物、人と自然とのふれあいをたくさん経験し、五感による体験的な実感を通して育む必要があると考えた。子どもたちが、より「いのち」を学び「いのちの大切さ」を実感できる経験は何かも考え、色々な視点からアプローチをはかって、「生」と「死」を子どもたちと一緒に考えていきたい。

(3) 研究発表の内容及び実践例

<研究課程1年目>

“自然との関わりから、いのちのつながりを感じる”ために、1年目は以下の4つの視点からアプローチをはかった。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ①「植物とのふれあい・食事から感じる」 | ②「生き物とのふれあいから感じる」 |
| ③「大人（先生や地域の人）との関わり」 | ④「五感を意識した自然体験」 |

<具体的な取り組み>

◎野菜の切れ端を育ててみよう（にんじん・玉ねぎ・ねぎ・大根・たけのこ）

◎プランターで野菜を種から育ててみよう

（レタス・ちんげんさい・小松菜・ほうれん草・はつか大根）

◎畑で玉ねぎ、じゃがいもを育てて、収穫、調理していただく

◎食事を作る大変さを経験しよう

◎丸鶏を調理していただく

◎メダカ・ダンゴ虫・おたまじゃくしの飼育

◎にわとりの飼育 たまごから育ててみよう



<1年目の課題>

これらの活動を通して、子どもたちにとって「いのち」が身近な言葉となり、園でも家庭でも会話の中に「いのち」という言葉が多く聞こえるようになった。また、大人と子どもが共に一つひとつの「いのち」と向き合い、立ち止まって悩み、一緒に考え、「生」と「死」について共有体験を積み重ねていくことで、様々な感情が芽生え、いのちを感じることができたように思う。

今後は更に「いのちのつながり」が自然を通してより深く感じられるような経験をしていき、「いのちの尊さ」「いのちの重さ」についても共に考えていきたい。



<研究課程2年目>

にわとりとのふれあいから、日常的に「いのちのつながり・いのちの尊さ・いのちの重さ」を感じる。

<具体的な取り組み>

①にわとりとの関わりを考える（にわとり会議）

- ・えさを食べようとするにわとりを捕まえ抱っこしたり、綱渡りをさせようと柵の上のにわとりを乗せたり、遊びに参加させる姿が見られたが、本当ににわとりが喜んでいるのか疑問を投げかけ、会議を実施。
- ・ロールプレイで「にわとりの気持ち」を体験し、「追いかけられるのは嫌」「見守られていると安心できる」との気づきが出た。
- ・以降、にわとりの気持ちを考えて接する姿が増え、さらに1羽ずつに名前と足輪をつけることで「かけがえのないいのち」として関わるようになった。



②にわとり小屋の掃除

- ・子どもたちの声から、初めて自分たちで掃除に挑戦。
- ・臭いや重さに苦労しつつも、にわとりのためにやり遂げる姿が見られた。
- ・出た糞を畑や文旦の木の下にまき、「自然の循環」に気づく機会となった。



③畑づくりと収穫

- ・にわとりの糞を肥料に活用してじゃがいも・玉ねぎを栽培。
- ・昨年度より大きな野菜が収穫でき、「にわとりのおかげ」と自然やいのちへの感謝の言葉が出た。
- ・にわとり会議では「にわとりが元気だから野菜も育つ」「いのちはつながっている」との声があった。



④にわとりの誕生日会

- ・子どもたち主体で内容を話し合い、ケーキ作りや飾り付けを実施。
- ・にわとりを家族や友だちのように大切に思う姿が見られた。
- ・えさや食べ物の調べから、加工食品や原料への関心も広がった。



⑤調理体験（マヨネーズ作り）

- ・マヨネーズの材料や作り方を調べ、自分たちで実際に作成。
- ・卵の役割や調理の大変さを体験し、最後までやり遂げる姿が育まれた。
- ・出来上がったマヨネーズを収穫した野菜に添えて食べ、「にわとりさんありがとう」と感謝が自然に表れた。



⑥食べ物の成り立ちといのちの学び

- ・「ハンバーグには何が入っている?」「ちくわはどう作る?」などの疑問から調べ学習を展開。
- ・食材カードや表を使って理解を深め、動物や魚のいのちに気づく。
- ・「唐揚げはにわとりさんのお肉」と理解し、「ありがとうで食べる」といのちへの感謝を口にした。



(4) 反省と考察

昨年度は、にわとりを卵から育てたり、丸鶏を調理していただいたり、非日常的な活動の中で「いのち」と向き合い、「いのち」の大切さを感じることができたが、今回は日常の中でのエピソードを通して、自然、動植物、人間社会全ての生命が互いに関係し合い、支え合いながら存在し、自然から得ることで生かされて生きていること、つながりを感じることができた。

食べ物のいのちを調べ始めてから、普段食べている給食やお弁当をいただく前に、「今日は何が入っているのかな?」「どんないのちが入っているのかな?」と話をしてから食べるようになり、感謝しながらいただくことが日常化してきている。また、「いただきます」「ごちそうさま」の言葉の重要性も改めて感じることができ、以前よりも心のこもった言葉となってきたように感じる。

中長期的な視点からみると、日常の中で「いのちのつながり」の体験を積み重ねることで、将来、社会の様々な問題に直面した際も、いのちを尊重し、環境を考え、他者に寄り添う視点から深く物事を捉える力が育まれると感じる。

学力だけでは得られない豊かな人間性を育む上で、「いのちのつながり」の実践は、子どもたちが自身の「いのちの尊さ」を認識し、他者の「いのちの重さ」を感じ取る力を養い、共生社会の担い手として成長する重要な一歩となると確信している。

(5) 今後の課題

1. 命の理解をどう深めるか

- ・命をいただくことの意味をさらに具体的に捉えられるよう、食物連鎖や環境とのつながりにまで広げた活動を工夫していきたい。

2. にわとりの福祉と子どもの欲求の調和

- ・子どもの愛情表現がにわとりに負担とならないよう、生き物を尊重する視点を持ちながら関わりを継続できる環境を整える必要がある。

3. 体験を日常生活にどうつなげるか

- ・表などを用いながら、給食や家庭での食事の場面にも学びをつなげ、保護者と協力しながらいのちや食への感謝を共有していきたい。

4. 継続性と発展性の確保

- ・にわとりに限らず、植物や昆虫など多様な生き物とのかかわりに広げ、年間を通じていのちの循環を学べる仕組みを作していきたい。

2. 研究討議

(1) 自然との関わりは、どのような学びや育ちにつながると感じますか。

(2) 食育について、どのような取り組みや声掛けを行っていますか。

1 グループ

◎自然との関わりについて

- ・生き物を育てる体験を通して「こうすればこうなる」と理解が深まる。
- ・自然には人の力ではどうにもならない部分があり、学びにつながる。
- ・観察・調べる力が培われ、次の行動を考える力につながる。
- ・自分以外の存在や自然とのつながりを知り、感謝や思いやりを育む。

◎食育について

- ・野菜や稲を育て、収穫・調理まで体験することで「命をいただく」意識が芽生える。
- ・給食室で調理の過程を見たり、自分で作ることで「自分の手で作った」実感を得られる。
- ・毎年種を受け継ぎ、お茶作りなどを通して保護者とも共有する取り組みがある。
- ・食材への感謝や、食べることの大切さを感じられる学びにつながる。



2 グループ

◎自然との関わりについて

- ・生き物や自然との触れ合いを通じて「命のありがたさ」を感じる。
- ・カラスやツバメの営巣など、身近な生き物への対応も子どもにとって学びになる。
- ・草や虫、落ち葉など環境管理の難しさを実感しながら保育に活かしている。

◎食育について

- ・「いただきます」「ごちそうさま」に命と人への感謝を込めて実践。
- ・給食の内容を確認しながら、栄養や体への働きを子どもと考える。
- ・作ってくれた人へのお礼を大切に、食べることへの感謝を育む。

3 グループ

◎自然との関わりについて

- ・孔雀など多様な生き物を飼育するが、園だけで管理は大変。地域の協力が重要。
- ・飼育や世話を通して、子どもに貴重な体験を提供。
- ・猪や熊などへの安全対策も必要で、現状を共有しながら保育を工夫。
- ・小さい子どもは動物を「おもちゃのように扱う」こともあるが、経験を重ねて関わり方を学ぶ。

◎食育について

- ・給食提供の園と、お弁当持参の園があり、環境に応じて工夫している。
- ・食を通じて子どもの学びや体験につなげている。

4 グループ

◎自然との関わりについて

- ・野菜や花を育てる中で、成長過程や特徴を知る。
- ・動物に食べられてしまうなど、失敗も含めた経験を学びにする。
- ・畑が近くにあったり離れていたり、それぞれの環境で工夫し、見たり資料で補ったりして学ぶ。

◎食育について

- ・苗を買い、水やり・収穫を経て食材を理解する。
- ・収穫物を栄養士に渡し、調理・試食する体験で「食べたい気持ち」を育む。
- ・給食で産地を伝える取り組みもあり、食材への関心が深まる。

5 グループ

◎自然との関わりについて

- ・体験を通して自然に主体的に関わる。
- ・日常ではできない体の動きを経験できる。
- ・小動物や環境との関わりから、思いやりや他者への配慮を育む。

◎食育について

- ・乳児期からの仏教的な「手を合わせる挨拶」を大切にしている。
- ・野菜や芋を育て、収穫して食べる体験を重ねる。
- ・食材の栄養や体への働きを子どもと一緒に考える。
- ・「命をいただく」視点を保育の中で意識することの大切さを再確認。

6 グループ

◎自然との関わりについて

- ・生き物を育てるには毎日の世話が必要で大変さもある。
- ・ウサギが増えすぎたり、カメが卵を産んだりと予期せぬ出来事も経験。
- ・命を育てる難しさや責任を通じて、子どもたちと共に学びを得る。

◎食育について

- ・生き物や作物を通じて「命をいただく」ことの意味を学ぶ。
- ・世話や観察、収穫などの体験が、食や命への感謝につながる。

3. 井田昭彦先生の指導助言

(1) 1年目の取り組みと学び

- ・卵からひよこ、そして鶏へと育てる体験を通し、命の尊さや責任を子どもたちが体感できた。
- ・野菜作りや調理など「食」に関わる体験から、命をいただくことへの感謝が育まれた。
- ・自然や生き物に直接触れる体験は、知識だけでは得られない「ワクワク・ドキドキ・キュン」といった感情を呼び起こす。
- ・幼児期にこそ「感情が揺れる体験」が必要であり、それが命の教育の基盤となる。
- ・指導者は「啐啄同時」の姿勢、すなわち子どもの主体性を尊重しつつ適切に寄り添うことが大切。
- ・体験後には振り返りの場（ひよこ会議など）を設け、気づきを言葉にして共有することで学びが定着する。
- ・何より大切なのは、大人自身も本気で命と向き合う姿を見せること。その姿が子どもに伝わる。

(2) 2年目の課題と発展

- ・課題は「日常化」。特別な体験を一時的な感動で終わらせず、日常の中に命を感じ続けられる工夫が必要。
- ・「ハレ（特別な非日常体験）」と「ケ（普段の日常）」を結びつけることが鍵。
- ・非日常体験が命への関心を高め、その後の日常に落とし込むことで、継続的な学びとなる。
- ・非日常には二つの種類がある：偶発的なもの（子どもの気づきや提案から生まれる体験）
意図的なもの（保育者が計画して用意する体験）
 - 両方をバランスよく取り入れることが望ましい。
- ・日常化を継続するためには「無理なく続けられる工夫」が必要。
 - 例：食事のときに命を考えるマグネットボード、本の配置など。
- ・保護者も関わるイベントは、家庭での命の教育にもつながる。

(3) まとめ

これからの取り組みに向けて、「継続する」のではなく「継続し続ける」ことが大切。すべてを完璧に続ける必要はなく、先生方が「これは続けられる」と思えることを、無理なく丁寧に続けていくことにこそ価値がある。そうした積み重ねの中で、子どもの心に本物の学びが刻まれていく。そして、子どもにとって一番身近な自然は、まぎれもなく先生方自身である。先生方が日々の中で命と本気で向き合い、人間味あふれる姿を見せていくことが、子どもにとって最大の教育になると信じている。2年間の実践を通して培われたこの学びを、ぜひこれからの日常の保育の中で活かし、命と向き合う教育をさらに深めていくことを期待している。

